九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# アンドレ・シェニエ覺書(一)

永田, 英一

https://doi.org/10.15017/2332892

出版情報：文學研究. 51, pp.21-25, 1955-03-20. 九州文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

# アンドレ・シェニエ覚書（一）

永田英一

一八二〇年代の若い詩人達がアンドレ・シェニエ*をかれらの直接の先駆として祭りあげたことは、シェニエの評家のあいだでながく論議の的となつていたが、今日では、諸家はひとしくこれをシェニエの本質を見誤つた錯覚あるいは誤謬と看做している。けれども、こうした見解は要するに一種の結果論であつて、われ／＼はこうした結果論の背後にシェニエとローマン派とのあいだに実際存在した深い近親関係――つまり一つの重要な歴史的事実を見失つてはならない。

* André-Marie Chénier (1762—1794)

アンドレ・シェニエをローマン派の「先駆」または「長兄」として祭りあげた、いわば張本人はサント・ブーヴであつた。サント・ブーヴはまづ「十六世紀フランス詩の概観」[1]において、シェニエに讃辞を呈し、「ヴィクトル・ユゴーはアンドレ・シェニエの継承者である」といい、また「マチュラン・レーニエとアンドレ・シェニエ」[2]においては「レーニエは一つのエポックを閉ぢ、シェニエは今一つのエポックを開く」といつたが、特に「ジョゼフ・ドロルムの生涯と詩と思想」[3]においては、いわばシェニエの「擁護と顕彰」に憂身をやつしているとさえ思われる。――

ジョゼフ・ドロルムは、「精神も心情も、あのアンドレ・シェニエが断頭台の下から十九世紀に遺贈した若い詩派に属して」いて、その「詩」においては、もし自分が「あの恐しい日々」に生きていたなら、

"Que j'eusse alors, tout fier, porté comme au martyre,
Après Roland, Charlotte, et le poète André,
Ma tête radieuse à l'échafaud sacré!"
—*Dévouement*—

（大意。――従容として殉教者のごとく、ローラン、シャルロット、そして詩人アンドレに続いて、聖なる断頭台に、わが首級をさし出したであろうに！）

と叫ぶ。そしてもし運命の神の手の中で「いけにえ」の取替えがゆるされるならば、自分はアンドレの身代りにもなつただろうと

さえ言つている。またジョゼフの「思想」によれば、シャトーブリアンはエコールを作らなかつたが、シェニエはそうではなく、自分達はシェニエの「後継者」であつて、この新しいエコールの詩格は、ラシーヌやドリーユのそれよりも、シェニエのそれに「明らかに」 Evidemment に似ている。そしてシェニエのスタイルは「あたかも大きな緑の森であつて、そこを散策すれば、歩毎に、新しい花々、果実、葉ぶり、またありとあらゆる形や色の草木があり、百千の羽色の小鳥はうたい、そしてあちこちに思わぬ景色やひろい空地があつて、神秘な遠景をひらき、天空をむき出しにする」のである。——

こうしてサント・ブーヴは、本質的に十八世紀の子であり、クラシック流の詩人であつたアンドレ・シェニエを無理にも当時の趣味で変形し、これを「ローマン軍」の旗印として押し立てたのであつた。したがつて、このローマン派の代弁者は、シェニエについて若き文学改革者達のおかした錯覚あるいは誤謬の責を一身に背負わされる羽目になつた。サント・ブーヴこそ、その唯一の責任者 (Responsable) であり、真実の有罪者 (Coupable) であると人々は主張する。けれども、われ〳〵はこの主張をきくたびに、サント・ブーヴ以前に、かれをも含めたローマン派の人々をこの方向に推進した二つの大きな力のあつたことを想わずにいられない。それはシャトーブリアンとヴィクトル・ユゴーである。

1) Sainte-Beuve, *Tableau de la poésie française au XVI^e siècle*, 1828.

2) ——, *Mathurin Régnier et André Chénier*, 1829.

3) ——, *Vie, poésies et pensées de Joseph Delorme*, 1829.

## 一、シャトーブリアン

シャトーブリアンは一八〇二年「キリスト教真髄」*の中でアンドレ・シェニエの存在を明らかにした。そしてそれは二つの「註」に書かれたごく短い文章ではあるが、その示唆するところは極めて大きかつたと思われる。——

* Chateaubriand, *Génie du christianisme.*

シャトーブリアンは同著第二部第三編の第六章「田園の愛——シクロープとガラテ」 *Amour champêtre.——le Cyclope et Galatée* において、このテオクリート (Théocrite) の「傑作の一つ」について語り、「周知のように近代人、殊にフランス人は牧歌形式においてほとんど成功しなかつた」と述べているが、ここでシェニエを想いおこして、欄外にこう記している。

「革命はわれ〳〵から相聞牧歌において稀な才能を約束していた一人の男を奪つた。それはアンドレ・シェニエ氏であつた。わたしはかれの牧歌集の原稿をみたが、そこにはテオクリートに匹敵するものが多々ある。このことは、断頭台におけるこの不幸な青年の言葉を納得させる。かれは自分の額をたたいてこういつた、〝死ぬなんて！ぼくはここに何かを持つていたのだ！〟これは死の瞬間にミューズがかれの才能をかれに啓示したのであつた。」

＊ ***Mourir! j'avais quelque chose là!*** この言葉もシェニエの悲劇的最期をかざるロマンチックな傳説の一つであろうが、とにかくこれを最初に文字にして紹介したのはシャトーブリアンである。

またシャトーブリアンは、これと関聯して、同著巻末の「註と解説」[*]の部で、もうすこし詳しくシェニエのことを記している。——

＊ ***Notes et Éclaircissements***, Note xv.

シャトーブリアンはまづみづから「そらんじていた」シェニエの若干の断片を引用して、そしてこれらの断片は「ギリシャの詩人から洩れたように思われ、それほど古代の趣味にみちている」という。

Accours, jeune Chromis, je t'aime et je suis belle;
Blanche comme Diane et légère comme elle;
Comme elle grande et fière; et les bergers, le soir,
Lorsque, les yeux baissés, je passe sans les voir,
Doutent si je ne suis qu'une simple mortelle,
Et, me suivant des yeux, disent: "Comme elle est belle!"

Néère, ne va point te confier aux flots,
De peur d'être deesse, et que les matelots
N'invoquent, au milieu de la tourmente amère,
La blanche Galatée et la blanche Néère.

（大意。——若きクロミスよ、わたしはお前を愛する。わたしはディアーヌのように美しく、白く、また誇り高い。ゆうべ、羊飼達は、わたしが眼をふせて通りすぎると、わたしが唯の人間なのかどうかと審かる。そして、眼でわたしを追い、〃何てきれいだろう！〃という。ネエールよ、女神になるのを惧れて、波を信じてはならない。そして船乗達も、嵐の中で、眞白きガラテとネエールに祈らぬように。）

これは普通「牧詩」 ***Bucoliques*** あるいは「短詩」 ***Épigrammes*** の中に分類される断片であるが、実は二つの小断片で、上六行と下四行は別のものである。そしていづれも大したものではないし、また必ずしもシャトーブリアンの趣味に適つているとは言えないが、シャトーブリアンに引用されたために評家の間では知られている。

つぎに、もう一つの牧詩「病める人」 ***le Malade***（「病める若者」 ***le Jeune Malade*** ともいう）は、「引用するにはあまりに長いが、もつとも感動的な美にみちている」という。そしてシャトーブリアンは今度は「別種の断片」としてつぎのエレジーを引用している。

Souvent las d'être esclave et de boire la lie
De ce calice amer que l'on nomme la vie;
Las du mépris des sots qui suit la pauvreté,
Je regarde la tombe, asile souhaité;
Je souris à la mort volontaire et prochaine;

Je la prie, en pleurant, d'oser rompre ma chaîne,
Le fer libérateur qui perceroit mon sein
Déjà frappe mes yeux et frémit sous ma main.
.....
Et puis mon coeur s'écoute et s'ouvre à la foiblesse:
Mes parents, mes amis, l'avenir, ma jeunesse,
Mes écrits imparfaits, car à ses propres yeux
L'homme sait se cacher d'un voile spécieux.
A quelque noir destin qu'elle soit asservie,
D'une étreinte invincible il embrasse la vie,
Et va chercher bien loin, plutôt que de mourir,
Quelque prétexte ami pour vivre et pour souffrir.
Il a souffert, il souffre: aveugle d'espérence,
Il se traîne au tombeau de souffrance en souffrance;
Et la mort, de nos maux ce remède si doux,
Lui semble un nouveau mal, le plus cruel de tous.

（大意。――しば〳〵人生と呼ばれるこの苦杯をなめることにも飽いて、また貧困に伴う愚か者共の軽蔑にも飽いて、ぼくは所望の住家、墓場をみつめる。ぼくはみづから進んで近き死にほほえみかけ、泣きながら、ぼくの鎖をきれよと願う。ぼくの胸をつきさす救いの刃は、はやぼくの眼を射、ぼくの手許にふるえている。…ついでぼくの心はみづから省みて、崩折れる。ぼくの親達、友人達、将来、ぼくの青春、ぼくの未完の作品。人間はわれとわが眼に、もつともらしいヴェールで身を隠すもの。人生がいかに暗いさだめであれ、人間は無性にこれを抱きしめる。そして死ぬよりも、生きるため、苦しむための口実を遠く〳〵もとめにゆく。人間は墓まで苦しみから苦しみへと身をひきずり、そして死、このわれ〳〵の不幸の甘い救いも、また新たな不幸、なべての禍の中でももつとも残酷なものに思われる。）

これはシェニエのロンドン滞在中の作で、ここでは用語に多少異同があり、またつぎの前句も略されている。

O nécessité dure! ô pesant esclavage!
O sort! je dois donc voir, et dans mon plus bel âge,
Flotter mes jours, tissus de désirs et de pleurs,
Dans ce flux et reflux d'espoir et de douleurs!

（大意。――おお！つらい貧乏！重苦しい奴隷の身！おお、運命！ぼくは美しい青春にありながら、欲望と泪で綴織られたわが日々の、希望と苦しみの波間を漂うのを見なければならぬのか！）

けれども、このエレジーはまさに「ルネ」*René* の声、「世紀の病」の前兆ともいうべきもので、シャトーブリアン自身も「これが帯びているメランコリーの刻印からして、アンドレ・シェニエは、これを書きながら自分の運命を予感していたといえるだろう」といつている。またファゲはこれについて「シャトーブリアンがこの詩句に注意したことは驚くにあたらないだろう。かれはこれを散文で書くことができたであろうし、また、実際、いくたびかほとんどそのまま散文で書いたのだ」*といつている。

* Faguet, *André Chénier*, p. 159.

そして最後にシャトーブリアンはこうつけ加えている。

「この青年の作物、その該博な知識、その勇気、またマルゼルブ氏（M. de Malesherbes）への高貴な申し出、その不幸、その死、すべてがかれのメモワールの上にもつとも強い関心をひきつけるのに役立つている。フランスが、前世紀の末に、三人のすばらしい才能をその黎明において失つたことは驚くべきことだ。それはマルフィラートルとジルベールとアンドレ・シェニエだ。はじめの二人は困窮のはて死に、三人目は断頭台に消えたのだ。」

ここで「マルゼルブ氏への高貴な申し出」といつているのは、シェニエがルイ十六世弁護のためになした奔走のことであるが、これについては、実際シェニエのものと信じられる文章が残つているにも拘らず、いまだに決定的な確証はない。また三人の不幸な詩人については、われ〳〵はヴィニーの「ステロ」 *Stello* を想いおこすだろう。ヴィニーの「ステロ」では、周知のように、シェニエとジルベールとチャタートンが「三重の宿命」 *Triple fatalité* として描かれており、これは疑いもなくシャトーブリアンのこの文章にヒントをえたものと考えられる。——

とまれ、シャトーブリアンが「キリスト教真髄」の中でアンドレ・シェニエについて述べたことは、若い世代のあいだに特殊な注意を喚びおこさずにいなかつた。ヴィニーについては前述の通りであるが、ユゴーも一八一九年十二月「ル・コンセルヴァトゥール・リテレール」 *le Conservateur littéraire* の創刊号で、同年八月出版された「アンドレ・シェニエ全集」[1]について述べた際、あのロンドン滞在中のエレジーを同じく「別種の断片」として引用している。またサント・ブーブはシャトーブリアンの「註」によつてはじめてシェニエの「詩の泉」を知つたと告白して、アンドレの「詩の星」を最初に知らしてくれたのが、他ならぬ「真髄」の作者であつたとは、何という「美しい偶然か！」といつている。

実際、ファゲもいうように、「文学的関心がアンドレ・シェニエの上に喚びさまされ始めたのは〝キリスト教真髄〟（一八〇二年）から」[2]なのである。（未完）

1) *Oeuvres complètes d'André Chénier* (Paris, Beaudoin frères, Foulon et Cie, in-8°)——Henri de Latouche 編。これによつてシェニエの作品は死後二十五年にして初めて一巻にまとまつて公にされた。

2) Faguet, *André Chénier*, p. 160.

* 附記　都合で「ユゴーの部」はつぎの機会にゆづります。